



月刊 部品新聞

2009年1月 第38号

編集・発行 Unit

基礎の反対は？

フィジカルだけでなく、テクニカルトレーニングなどでも「基礎」という言葉はよく使われています。

研究などでも「基礎研究」という形で、様々な発表もあります。

あるときこの言葉の反対語がふと気になり、調べてみました。自分の感覚的には「応用」だと思つていましたが、意外な結果になりました。

ネットで見つけた

名古屋大学名誉教授であった物理学者の上田良二氏が残した文章がインターネット上*に公開されていました。そこに答えがありました。

上田氏曰く、「基礎」の反対は「末梢」であるということです。

基礎と抹消

確かに樹木にたとえると、「基礎」にあたる幹に対して、「末梢」に対する梢となり、イメージ的にすつきりします。梢は「応用」ではないですよ。

そのように考えると、基礎トレーニングと言いつつ、実は末梢トレーニングであったりする事も多いのではないのでしょうか。

これはスポーツにおける

様々な部分でも同様の様に思えます。もちろん末梢トレーニングが悪いと言うことではありません。しかし基礎がしっかりしていないのに、末梢トレーニングをしても競技力の向上にどれだけ効果があるのでしょうか。

また様々な研究発表においても、実際の競技力の向上にはあまり役に立たない、あるいは役に立てようがない、末梢ととらえることが出来るものも数多くあります。特に「基礎研究」と呼ばれているものの中でも、発展性のある物はスポーツの世界だけでなく、その他の世界でも少ないように思えます。

応用と純正

それでは「応用」の反対語は何になるのでしょうか。

上田氏は「応用」の反対語は「純正」であると述べています。私が基礎の反対語と考えていた「応用」は、「基礎」の反対語ではないということ。それではこの「応用」と「純正」の意味はどのようなになるのでしょうか。

「応用」は金儲けの魂胆があるもの、「純正」は金儲けと縁のないものとしています。

つまり商売ベースに発展する可能性のあるものが「応用」。商売とは関係なく、自分の興味の対象として行うものが「純正」となるのでしょうか。

この辺をスポーツに置き換えると、ある理論や道具を考えたとして、それらの販売や各種登録料や使用料、特許料などで商売ベースにのせていくとすれば、それは「応用」になり、競技力向上のために無償で提供してゆくとすれば「純正」となるのではないのでしょうか。

日本のスポーツの世界ではここでいう「応用」の部分は、スポーツは「純正」でなければ行けないと考える人々には非常に嫌がら

れます。ハード面ではともかく、ソフト面に關してはその傾向が強く表れています。

それでは職業としてスポーツに携わる人たち、特にソフトを提供している私たちのような職業の人たちは、どのようにして生計を立ててゆくののでしょうか。他に仕事を持ち、片手間で指導して、世界で戦える競技者を育てることはできるのでしょうか。

もちろん先ほどの「基礎」「末梢」と同様、どちらが良くてどちらが悪いというものではありません。

掛け合わせ

「基礎」の反対語が「応用」でないとすれば、これらの掛け合わせを考えることも可能です。

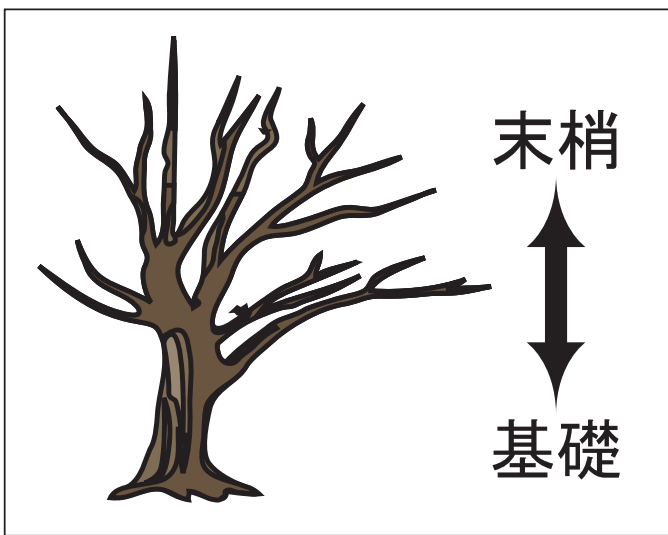
「応用基礎」、「応用末梢」、「純正基礎」、「純正末梢」の4つになります。

企業が活動をするとなると応用の部分は外せません。しかも基礎の部分よりも、より広がりのある「末梢」に目が向きます。

反対に研究などでは純正になり、発表をしなければならぬということから他人が行っていないような重箱の隅をつつくような末梢に目が向いてしま

います。どちらにしても、根幹となりうる「基礎」の部分が抜け落ちてしま

います。この基礎が何か、もう一度考え直して再構築することが、スポーツで世界を相手に戦えるようになるため一番の近道なのではないのでしょうか。



Unit 代表 澤野 博 (さわの ひろし)

日本体育大学卒。社会人経験を経て欧州へ留学。乳酸を中心としてトレーニングを幅広く学ぶ。帰国後、部品となって競技者を支えるという意味で「Unit」を設立。競技種目、競技レベルを問わずトレーニング指導を中心に活動。医療系国家資格の臨床検査技師の資格を持つ異色のフィジカルコーチ。

ご意見、ご要望、仕事依頼、お問い合わせは下記まで。

0422-34-5055 (Fax 兼用)、090-1999-2845 または sawano@team-unit.com